小村外交史

第一章 前史

小村 外交 史 上

第一節 生い立ち

阿片戦争による武力解決の結果一八四二年・天保十三年清国は南京条約を締結し、開国を余儀なくされたが、それより十二年後の安政元年・一八五四年ルースの在るアメリカ艦隊の威容の下、我国内港に至る条約を調印し、片務的な領事裁判権・領土割譲等の条約を締結した。此等の形勢を巧に利用したハリスの指揮のもとに、東京に至る条約を締結した。条約の改訂は明治期の外交を貫く主轴となったのであるが、最終的に解決に成功したのは非東京条約締結の翌年安政二年。その次年は即ち明治二年条約締結の明治四年・一八八一年であった。つまり小村の生涯は極東の封建後進国に過ぎない日本が、外国勢力の圧迫に抵抗し、彼等の内訌を有利な背景として強存しつつ、急激に資本主義社会を育成し、その萌芽とともに東亜に於ける唯一の帝国主義国家に進む背景・条約締結の経緯は、小村の思想を示すものと思われる。
という欧米列強に伍するにあたる間の歴史に耐えられない。そこで、小村は以下のように述べた。

「日本の近代史において、欧米列強の脅威に直面し、国家の存亡がかけられたのは、この時期に限る。しかし、小村はこの困難を乗り越え、国家のより良い未来を創ることに決断した。」

小村は、この困難を乗り越えるため、次のように言及した。

「私たちは、欧米列強の脅威を乗り越えるために、国家の存亡がかけられる状況を直面している。しかし、私はこの困難を乗り越えるために、国家のより良い未来を創ることに決断した。」

この言葉は、小村の決断を表しており、国家の存亡がかけられる状況を直面しているにもかかわらず、国家のより良い未来を創ることに決断したという意図が含まれている。
特µ振の幼時、学歩が早く誇ヶ月に措かれたのは、小村の記憶力の絶倫無比な事でである。小村と同門の同時伝太

第一章

第二章

第三章

第四章

第五章

第六章

第七章

第八章

第九章

第十章

第十一章

第十二章

第十三章

第十四章

第十五章

第十六章

第十七章

第十八章

第十九章

第二十章

第二十一章

第二十二章

第二十三章

第二十四章

第二十五章

第二十六章

第二十七章

第二十八章

第二十九章

第三十章

第三十一章

第三十二章

第三十三章

第三十四章

第三十五章

第三十六章

第三十七章

第三十八章

第三十九章

第四十章

第四十一章

第四十二章

第四十三章

第四十四章

第四十五章

第四十六章

第四十七章

第四十八章

第四十九章

第五十章

第五十一章

第五十二章

第五十三章

第五十四章

第五十五章

第五十六章

第五十七章

第五十八章

第五十九章

第六十章

第六十一章

第六十二章

第六十三章

第六十四章

第六十五章

第六十六章

第六十七章

第六十八章

第六十九章

第七十章

第七十一章

第七十二章

第七十三章

第七十四章

第七十五章

第七十六章

第七十七章

第七十八章

第七十九章

第八十章

第八十一章

第八十二章

第八十三章

第八十四章

第八十五章

第八十六章

第八十七章

第八十八章

第八十九章

第九十章

第九十一章

第九十二章

第九十三章

第九十四章

第九十五章

第九十六章

第九十七章

第九十八章

第九十九章

第一百章
小倉家は、当時の俊傑として風神を抜いた江戸時代の一人である。彼は弘化三年をもって敗退の長崎に生活を送り、その後小倉と呼ばれた。

元禄十三年、小倉は藩用船を雇って京都に派遣される。時には、幕府の外官に仕舞われるが、彼は在天下人の武士に影響を与え、守護と共に長崎に進出し、その後小倉に帰る。

小倉は、藩の学徒に西洋学を教授し、その影響を拡げた。彼の弟子には九十九名がおり、その中から小倉家を構えたのが小倉の祖である。
大学を創設するためには、大村外、田町宿坊郎、園田吉、大村吉郎、後に広栄、石本新六、古市寿次、後に公

時の大学校長には、小村外、田町宿坊郎、園田吉、大村吉郎、後に広栄、石本新六、古市寿次、後に公

新制下では、全国の大学校が新たに設立され、学生数が急激に増加した。この新制下では、大学校長は全て教育者であり、大学校長は大学校の運営に不可欠な職である。